

国際協力特別賞

思いを繋ぐランドセルギフト

学校法人西大和学園 西大和学園中学校 2年 久保田 彩煌

「ランドセル、送ってまない？」

小学校で使ったノートや教科書・作品等を片付けていると母にそう提案された。それをきっかけに「思い出のランドセルギフト」というアフガニスタンの教育の機会に恵まれない女の子に、使い終わったランドセルを届けるプロジェクトを知り、自分がランドセルを選びにお店へ連れて行ってもらったときのことを思い出した。これから六年間毎日背負うカバンなのだから真剣に選んだランドセルを、初めて背中に背負わせてもらったとき「このカバンで学校に行って精一杯に勉強すれば何にでもなれる気がする」と思った。それから、ランドセルを背負って学校へ通い、「なりたいもののためにもっと勉強したい」と塾にも通わせてもらって沢山の人の応援してもらいながら自分はここまで成長することができた。あとから思えば、あのキラキラと光って見えたランドセルは私の第一歩を強く後押ししてくれる存在だった。

私は、興味があったので詳しく調べてみるとランドセルをプレゼントすることで中学年にあがって学校を中退する子が減ることや、子供が学校へ行っていることが大人にとって分かりやすいため自分の子も学校へ通わせようという親が増えることを知った。よって、就学や学校に通い続けることのハードルが下げられると思った。

自分が両親や周りの沢山の人の助けをもらったように、自分も誰かの夢への第一歩を応援して、してもらった分を繋ぎたいと思い「思い出のランドセルギフト」プロジェクトに参加させてもらうことを決めた。そして、気持ちだけでもと色鉛筆、鉛筆、消しゴムを入れて応募先の検品所へ向けてランドセルを送った。

そのあと、プロジェクトのサイトに女の子がとても嬉しそうにもらったランドセルを抱えている写真がアップされた。どんな子なのか知っている訳ではないけれど、「よかったね」と涙が出そうになった。ずっと一緒に頑張ってきたランドセルが誰かの手に届いて、またなりたいものに向かって踏み出すきっかけになれたのだ。小学一年生、初めてランドセルを背負った時のあの気持ちを届けられたと思うと喜びがこみ上げてきた。

女の子だからというだけで勉強しなくていいと言われて、十分な教育を受ける環境を整えられない子供達がたくさんいる中、叶えたいもののために勉強したいと思ったときに応援してくれる人がたくさんいて、十分すぎるほどの環境を整えてもらえるという決して当たり前ではないことに精一杯感謝して、自分にできる「応援」を小さくてもいいから、続けていきたいと思う。